

大・ タイガー 立石展

トラック、
トラベル、
トラップ、
トランス

TIGER TATEISHI :
The Retrospective
-Track ,Travel ,Trap ,Trance



《Green Monster》1976-77年 田川市美術館蔵

2021.7/20 [火] - 2021.9/5 [日]

※新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の拡大状況により、
展覧会の内容等が変更されることがあります。詳細について
は美術館ホームページでご確認ください。

www.aomori-museum.jp

大・タイガー立石展公式Webページ



開館時間：9：30 - 17：00（入館は16：30まで）

休館日：7月26日（月）、8月23日（月）

観覧料：一般1,500（1,300）円、高大生1,000（800）円、小中学生無料

※（ ）内はWebチケット料金。

※Webチケットでご入場の際には特製チケット（デカチケ）をプレゼントいたします。

※心身に障がいのある方と付添者1名は無料。

□主催：大・タイガー立石展青森実行委員会（青森県立美術館、青森放送、青森県観光連盟）、読売新聞社、美術館連絡協議会

□協賛：ライオン、DNP 大日本印刷、損保ジャパン

□特別協力：ANOMALY

□協力：青い森鉄道、JR東日本青森商業開発

□後援：青森ケーブルテレビ、東奥日报社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、青森県教育委員会

□お問い合わせ：大・タイガー立石展青森実行委員会（青森県立美術館内）〒038-0021 青森市安田近野 185 TEL 017-783-3000

アート コミック ピクチャーブック イラスト オブジェ 表現ジャンルを自在に横断しながら独創的な世界を展開した タイガー立石の大回顧展！

絵画、陶彫、マンガ、絵本、イラストなどのジャンルを縦横無尽に横断しながら独創的な世界を展開した立石 紘一、ことタイガー立石、こと立石大河亞（1941-98）。

1941年、九州・筑豊の伊田町（現・福岡県田川市）に生まれた立石は、大学進学のために上京。63年の「読売アンデパンダン」展でデビューし、翌年には中村宏（1932-）と「観光芸術研究所」を設立。時代や社会を象徴する人物やイメージなどを多彩に引用して描かれたその作品は、和製ポップ・アートのさきがけとして注目を集めました。65年からは漫画も描きはじめ、「タイガー立石」のペンネームで雑誌や新聞にナンセンス漫画の連載をもつまですになります。60年代末から多くの子どもたちが口にした「ニャロメ！」という言葉は赤塚不二夫（1935-2008）と交流があった立石の造語でした。

しかし、マンガ家として活動が多忙になった1969年3月に、立石は突如としてミラノへ移住。そこから延べ13年にわたるミラノ時代は、マンガからヒントを得たコマ割り絵画を精力的に制作する一方、デザイナーや建築家とのコラボレーションで数多くのイラストやデザイン、宣伝広告などを手がけていきました。

イラストレーターとしての活動が多忙になってきた立石は再び環境を変えるため1982年に帰国。85年から千葉を拠点に活動します。90年以降は絵画や陶彫作品を「立石大河亞」、マンガや絵本を「タイガー立石」の名義で発表していきました。

立石の作品はどの時期のものであっても、さまざまなきごとや観念が地層のように積み重なっています。このため、「見る」だけでなく「読む」ことによって、わたしたちの思考の回路も多次元にひろがるかのようです。

立石は1998年4月に56歳という若さでこの世を去りましたが、生誕80年をむかえる今年、約200点の作品・資料によってその多彩な活動を振り返るのが本展です。「タイガー」をペンネームとした立石の「足跡」（トラック）を辿りながら、「観光」（トラベル）、「仕掛け」（トラップ）、「変容」（トランス）といった立石芸術の魅力に迫ります。

タイガー立石（立石 紘一/立石大河亞）略歴

- 1941（昭和16）年 12月20日福岡県田川市に生まれる（本名：立石 紘一）
- 1963（昭和38）年 武蔵野美術短期大学芸術デザイン科卒業。
「第15回読売アンデパンダン展」（東京都美術館）に出品。
- 1964（昭和39）年 初個展「立石 紘一 積算文明展」（銀座サトウ画廊）開催。
中村宏と「観光芸術研究所」設立。
- 1968（昭和43）年 タイガー立石に改名。この頃から漫画家として活動。
- 1969（昭和44）年 イタリア（ミラノ）に渡る。「コマ割り絵画」を発案。
- 1971（昭和46）年 エットレ・ソットサスの知遇により、オリベッティ社で仕事を得る。
- 1982（昭和57）年 帰国。漫画作品集の刊行や絵本の出版、個展の開催など精力的に活動。
- 1990（平成2）年 立石大河亞に改名。
- 1994（平成6）年 初の回顧展「立石大河亞1963-1993 筑豊・ミラノ・東京、そして…」が郷里の田川市美術館（福岡）で開催される。
- 1998（平成10）年 4月17日死去（享年56歳）。
- 1999（平成11）年 没後初の回顧展「メタモルフォーゼ・タイガー 立石大河亞と迷宮を歩く」（O美術館）、「立石大河亞展 THE ENDLESS TIGER」（田川市美術館）が開催される。



展示構成

1. プロローグ：田川～大地の記憶

立石紘一は1941年、福岡県田川市（当時・伊田町）に生まれた。

立石が少年期を過ごした頃の筑豊は石炭に需要のあった最後の時期にあたり、田川にもまだ多くの娯楽が残っていた。劇場や映画館で大衆演劇や極彩色のディズニー映画を、神社の境内でサーカスや見世物を夢中で見ていた立石少年。図書館では美術全集を読破、田河水泡の「のらくろ」や杉浦茂のナンセンスギャグ漫画、手塚治虫のSF漫画などを愛読し、竪坑、巨大煙突、ポタ山、石炭を運ぶ蒸気機関車など炭鉱町独特の景色を眺めながら様々な空想にふける日々を送っていたという。すでに中学時代には画家か図案家か漫画家になることを決意し、高校時代は映画館のフィルム運びや看板絵描きを手伝うアルバイトも行っている。そして1961年に武蔵野美術短期大学デザイン科に入学するため、田川を離れて上京する。



《香春岳対サント・ピクトワール山》1992年 田川市美術館蔵

生涯を通じて特定の地域に固執することのなかった立石だが、多感な少年時代を過ごした田川の特異な風土とダイナミックな社会性、雑多な文化環境が表現者としての基礎を作り、その「大地の記憶」が創造力のひとつの源泉となっていたことは疑いないだろう。

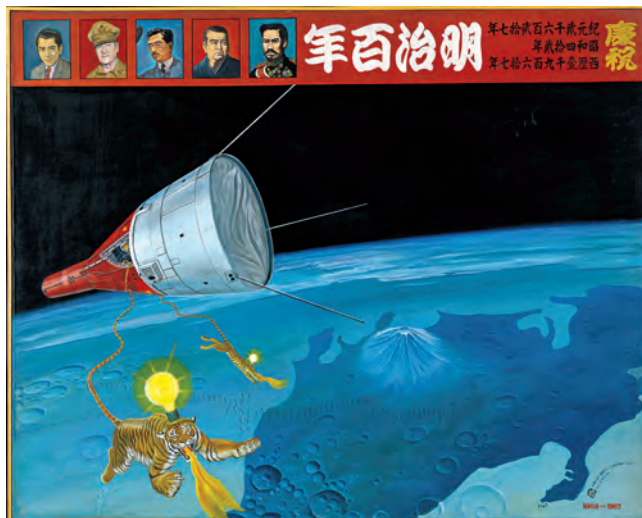
2. 1961-1969年 虎は世界を駆けめぐる ～絵画から漫画へ

立石は1961年に武蔵野美術短期大学デザイン科に入学。在学中は、文学や哲学書を貪り読み、映画も数多く見たという。63年3月ブリキのおもちゃや流木を貼り付けた《共同社会》を読売アンデパンダン展に出品し、注目を集める。64年1月ヤング・セブン展（南画廊）に自らの為の広告看板を連想させる《立石紘一のような》を出品し、以後立石は富士山、旭日をはじめとする雑多な通俗的イメージを具象的に描き、ナンセンスを基調とする独自のポップ・アートの世界を追求するようになる。

同年3月には約10歳年上の中村宏と観光芸術研究所を設立。オブジェやインスタレーションが中心の反芸術が隆盛を極めるなか、同研究所はあくまで絵画というジャンルにこだわり、その可能性を探求していった。66年、観光芸術研究所を解散した頃より立石は、自身の制作を美術作品から漫画へとシフトさせ、さらに自身の名前も立石紘一からタイガー立石へと変えた。立石は多くの雑誌で作品が掲載され、漫画家としての人気は高まり、収入も増えていったが、安住を拒絶するかのように、69年3月イタリア・ミラノへの移住を決行した。異郷の地に身を置き、全くの白紙の状態から再び絵を描き始めたのだった。



《立石紘一のような》1964年 高松市美術館蔵



《明治百年》1965年 青森県立美術館蔵

3. 1969-1982年 ミラノの虎

立石は1969年イタリアのミラノに渡った。ミラノでは早速、絵画に取り組み、漫画のコマ割りをそのまま絵画に描く作品を試みていく。こうしてナンセンスでありながら、時空間や形象の大胆な変容を物語にした「コマ割り絵画」が誕生し、色彩も過激なまでに豊穡さを極めていく。

ほどなくこれらの絵画は、当時の世界的画商アレクサンドル・イオラスの目にとまる。イオラスは立石の絵画を蒐集するようになり、各地にあったイオラス画廊で個展も開催された。

一方、立石の存在はイタリアの建築・デザイン界からも注目された。

柔軟な思考を持つ建築家、デザイナーとして知られるエットレ・ソットサスの知遇を得て、オリベッティ社内のソットサス工業デザイン研究所で、1971年から数年間イラストレーションの仕事に従事した。1970年代末になると、アレッシィ社やファブリ社といった企業や出版社からのイラストレーションの仕事の依頼が増える。モチーフに即しつつも、そこに命を吹き込むかのように描かれたイラストレーションを見ていくと、立石の秀でた画力が伝わってくる。これらの仕事も立石に新たな視点を与え、1982年の帰国以降、制作の手掛かりになっていく。



《Wiper in Jungle》1975年 courtesy of ANOMALY



《Green Monster》1976-77年 田川市美術館蔵

4. インターロード 漫画と絵本の仕事

立石は少年だった頃、知人から譲り受けた、いわゆる「墨塗り教科書」の余白にパラパラ漫画を描いたり、『漫画少年』に投稿するなど、戦後多くの子どもたちがそうであったように、漫画に夢中だった。

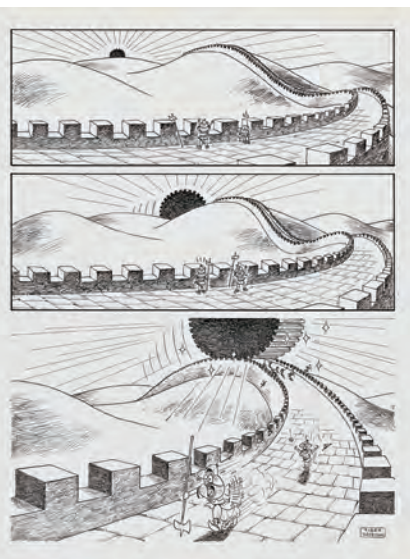
本格的に漫画を描き始めたのは1965年頃からで、66年以降は漫画制作が中心となり、『週刊アサヒ芸能』や『少年サンデー』、『ボーイズ・ライフ』などで活躍し、68年には自費出版ながらも『Tiger Tateishi』を出版した。その作風は、アメリカの風刺漫画のようなサイレントの形式をとりつつ、日本漫画の手法を生かし独自のナンセンス世界を構築したものであった。

ミラノに移住してしばらくは漫画制作から遠ざかっていたようだが、70年代後半から再び漫画を手がけるようになり、その成果は1982年の帰国後に出版された『虎の巻』(工作舎)にまとめられている。

それらの漫画は立石のあらゆる発想が「視覚的ショート・ショート」で表現されていて、立石の表現世界を理解する上で重要な作品と言えよう。

帰国後数年は、絵画制作と並行して漫画に関する仕事を盛んに行っていたが、初の絵本作品『とらのゆめ』が福音館書店より出版された1984年から晩年まで、絵本もほぼ1年に1作のペースで発表していく。

漫画、絵本、イラストレーション、絵画、立体に至るまで様々な表現活動を立石が同じ地平のものとしてとらえていた。立石と同じ目線でそれらの活動を通観してみると、広大な地平を支えている立石の多次元的な思考の連鎖が見えてくる。



「長城と日の出？」原画（『虎の巻 アララ仙人のおかしな世界』より）1982年 courtesy of ANOMALY



「銀河帝国戦士勝ちぬぎデスマッチ13 KGBs vs. CIAs」原画（『月刊小説王』第15号より）1984年 courtesy of ANOMALY



『とらのゆめ』より原画（『こどものとも』344号） 1984年 個人蔵



『顔の美術館』より原画（『月刊たぐさんのふしぎ』106号） 1994年 個人蔵

5. 1982-1998年 再びの日本～こっちにタイガー、あっちに大河亞

延べ13年にわたるイタリア滞在を経て、立石は1982年2月から再び東京を拠点に創作活動を続けていった。84年頃までは漫画やイラストレーションなど出版媒体の仕事が続いたが、85年に以降は絵画の制作も本格的に再開する。

1987年の個展「月海観光展」（INAXギャラリー東京/大阪）では軸装や卷子装で仕立て、モチーフとその状況の変形・変容によって空間と時間の境界を消失させていくような不可思議な光景の作品を発表し、同時に60年代の「観光」というコンセプトも改めて押し出していく。続く1989年の個展（村松画廊）では、夫人の実家の屋根裏から発見された60年代の油彩作品を修復（一部再制作）して展示。本展をとおして立石の再評価が進む一方、立石にとっても再び「虎」、「富士」を描くきっかけとなっていく。90年には「タイガーのイメージの群れが河の流れとなり、やがて広い情報の海に船出する」という意図から「立石大河亞」と改名し（漫画や絵本では引き続き「タイガー立石」の名義を使用）、明治、大正、昭和という日本の近代を総括する大画面の三部作を発表。その後も富士や虎、螺旋の紐や電子基盤に見立てた雲などをアイコンとし、俯瞰的な構図のもとに、時空を越えて過去と未来を眺望していく観念的な風景画を構築していった。

立石は1991年から陶彫による立体作品も手がけるなど、旺盛な創作意欲のもと常に斬新でユニークな表現を探索し続けていくが、98年4月に56歳という若さでこの世を去った。



《昭和素敵大敵》1990年 田川市美術館蔵



《富士のDNA》
1992年
courtesy of ANOMALY



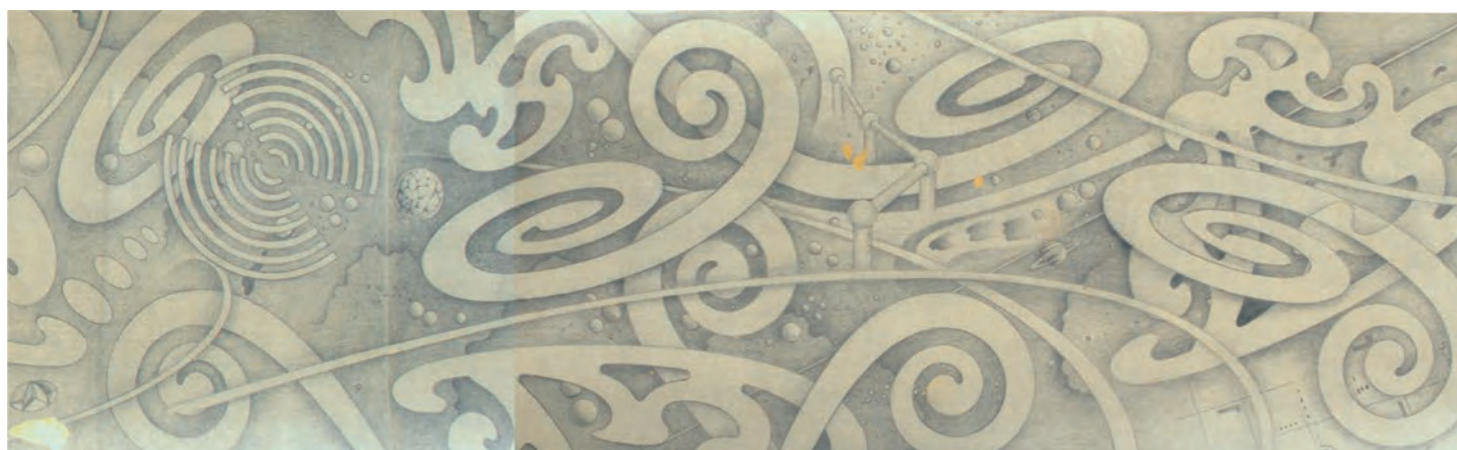
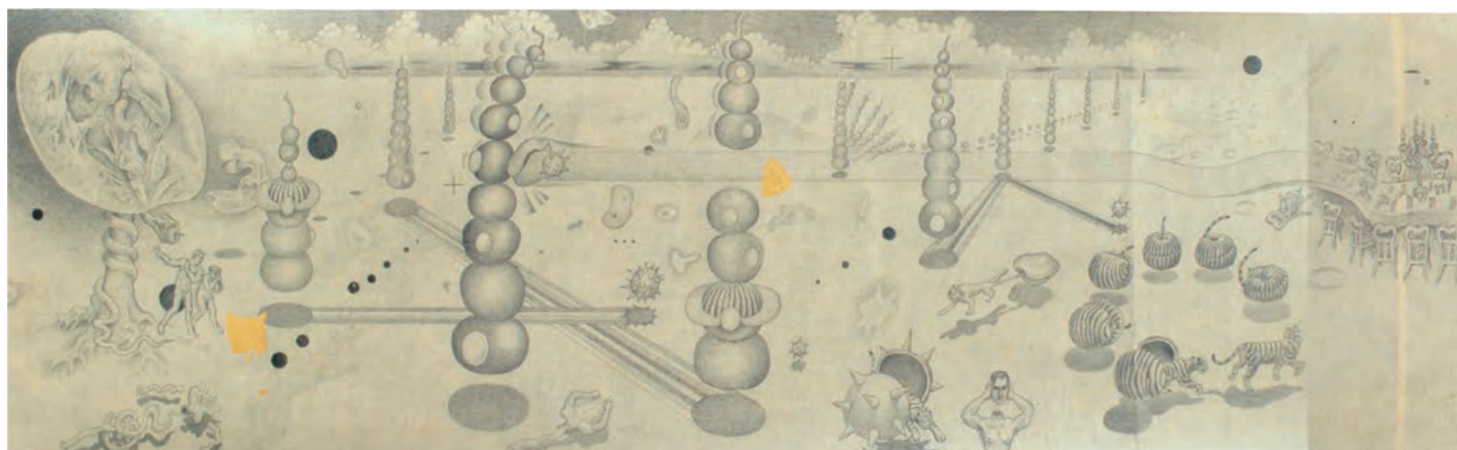
《DE CHIRICO》
1996年
個人蔵（青森県立美術館寄託）
撮影：二塚一徹

6. エピローグ 水の巻

《水の巻》は88年から90年にかけて水の文化情報誌『FRONT』に連載した作品を全6巻の絵巻物にまとめたもので、全長の合計が約9メートルにおよぶ壮大な作品である。鉛筆で繊細に描画され、ところどころに金箔が施されているこの作品は、水のモチーフを基調にしつつ、多種多様なイメージが綴られている。例えば、過去の自作や十八番の虎のモチーフ、ピカソの《ゲルニカ》のような歴史的名画、古今東西の風物、近未来のSF的な光景など、作者の脳裏に浮かんだあらゆるイメージが綿々と登場する。まさに森羅万象といってよい世界が、今にもアニメーションとして動き出すかのような、この画家特有の躍動感あふれる画力で描かれているのだ。

《水の巻》を通観していくと、自己の作品/他者の作品、過去/未来、西洋/東洋、ハイカルチャー/ローカルチャーといった区別は解消され、全てがシームレスに矛盾なく融合し、繋がっているのが分かる。描かれたイメージは完全に等価であり、そこに横断や越境という視点は感じられない。そもそも横断や越境とは、自己と他者、こちら側と向こう側、ハイ/ローといった差異やヒエラルキーを前提とした思考によって生まれてくる。しかしタイガー立石は、こういった思考を選択しない。

《水の巻》はタイガー立石が生涯の中で触れてきた世界を、まさに描きつくした大作であると同時に、こういった作者固有のラディカルな姿勢が鮮明にあらわれた作品と言える。



展示の見どころ

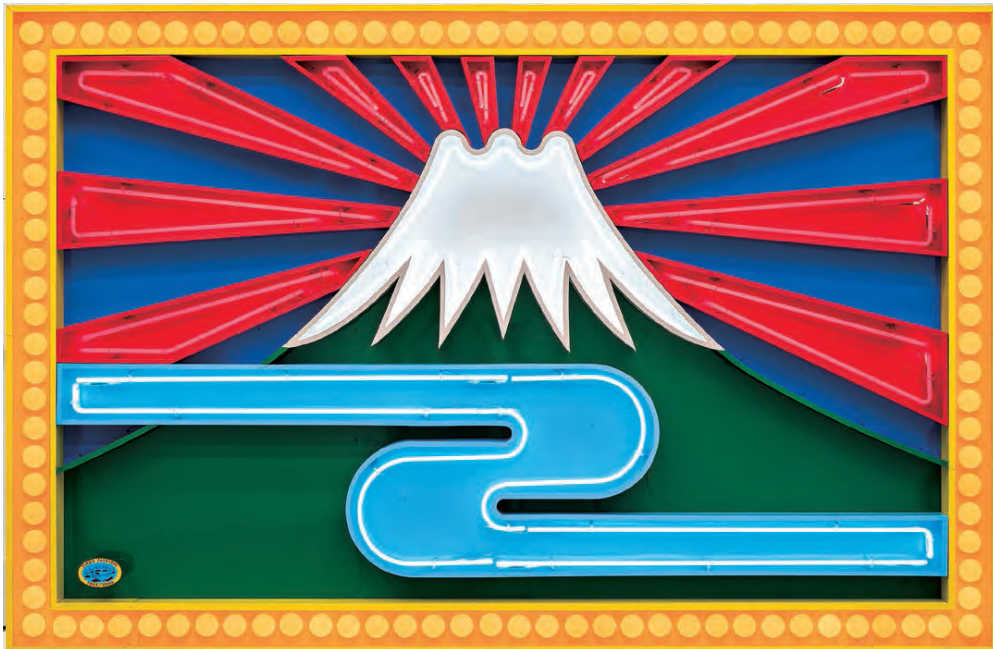
1. 生誕80年を記念した過去最大規模の回顧展

絵画（アート）、漫画（コミック）、絵本（ピクチャーブック）、イラスト、立体（オブジェ）と様々な表現ジャンルを自在に横断しながら独創的な世界を展開したタイガー立石。本展は立石の多彩な活動を、200点を越える作品、資料で振り返る過去最大規模の大回顧展です。高校生（17歳）の頃に手がけた油彩から死の直前に描かれた遺作まで、その芸術的展開を一望するとともに、イタリア時代の貴重な資料や漫画や絵本の原画も多数公開いたします。

2. 4つのキーワードで立石作品の見方をわかりやすく紹介

本展は「タイガー」をペンネームとした立石の「トラック」（足跡）を回顧しながら、以下のキーワードから作品の魅力を紹介します。

- 「トラベル」（観光）・・・自ら「観光芸術」を提唱したように世界のあらゆる事象を描き続けた立石は、過去と未来、西洋と東洋、自己と他者、ハイカルチャーとローカルチャーを等価に扱い、他に類を見ない豊かなイメージの世界を構築していきました。見ることの快樂が追及された立石の作品をとおして、あなたも時間と空間を自由に旅してみませんか。
- 「トラップ」（仕掛け）・・・漫画や絵本も多数手がけた立石。赤塚不二夫の名キャラクターである「ニャロメ」という名前も、当時赤塚と交流があった立石の漫画作品から引用されたものでした。ナンセンスなギャグ漫画を得意とした立石の絵画、絵本、立体作品にも多種多彩なネタとあっと驚くオチが仕掛けられています。あなたもそのトラップにはまってみませんか。
- 「トランス」（変容）・・・漫画から着想を得た「コマ割り絵画」ではイメージや時空間を自由に飛躍させ、1枚の絵の中でも様々なモチーフの動きを描いて変化させたり、立体ではアーティストの肖像と誰もが知っている代表作のエッセンスを360度ぐるっとまわって破綻なくつなげていくなど、「変容」という手法をもって変幻自在な新しい視覚を追求していった立石。その自由奔放かつ奇想天外なイメージの世界であなたも遊んでみませんか。



（ネオン絵画 富士山）1964/2009(昭和39/平成21)年個人蔵（青森県立美術館寄託）

同時開催

「コレクション展2021-2：ユーモアと祝祭」 2021年9月5日（日）まで

※馬場彬、豊島弘尚、岡本信治郎などタイガー立石と同時代に活躍した作家の作品を特集展示。

※「トキワ荘」の生みの親であり、戦後の漫画文化を育てた編集者、加藤謙一（弘前市出身）の資料も多数紹介（7月20日より）。

※Webチケットをお持ちの方は一般410円、高大生240円でご覧いただけます。

画像請求フォーム

画像はデータでご提供いたします。希望される画像にチェックをいれ、媒体名、御社名、ご担当者、ご連絡先などをご記入の上、本用紙をファックスでお送りください。

to 青森県立美術館 広報担当行 (Fax 017 783 5244)

媒体名

御社名

ご担当者

所在地

電話

メールアドレス (データ送付先)

<p>1. <input type="checkbox"/></p>  <p>・本展ポスター</p>	<p>2. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「立石絨一のような」1964年 高松市美術館蔵</p>	<p>3. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「明治百年」1965年 青森県立美術館蔵</p>	
<p>4. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「昭和素敵大敵」1990年 田川市美術館蔵</p>	<p>5. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「富士のDNA」1992年 courtesy of ANOMALY</p>	<p>6. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「銀河帝国戦士勝ちぬぎデスマッチ13 KGBs vs. CIAs」原画 (『月刊小説王』第15号より) 1984年 courtesy of ANOMALY</p>	
<p>7. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「全然問答集08」原画 (『タカール』no.158より) 1988年 courtesy of ANOMALY</p>	<p>8. <input type="checkbox"/></p>  <p>・『ぼくの算数絵日記』より原画 (『月刊たかさんのふしぎ』118号) 1995年 個人蔵</p>	<p>9. <input type="checkbox"/></p>  <p>・『顔の美術館』より原画 (『月刊たかさんのふしぎ』106号) 1994年 個人蔵</p>	<p>10. <input type="checkbox"/></p>  <p>・「DE CHIRICO」1996年 個人蔵 (青森県立美術館寄託) 撮影：二塚一徹</p>

プレスイメージ貸し出し条件

- 1 本展広報目的での使用に限ります。使用可能期間は本展会期終了までとなります。
- 2 展覧会名、会期・会場名のほか、画像の使用時には、作品名・制作年および収蔵美術館名を必ずご掲載ください。
- 3 作品画像は全図でご使用ください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変、部分使用はできません。
- 4 雑誌の表紙などに使用される場合は、本展実行委員会までご相談ください。
- 5 WEBにてご掲載の場合には、コピーガード(※右クリック不可)を施しダウンロード不可にしてください。
- 6 概要など確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で本展実行委員会までお送りいただきますようお願いいたします。
- 7 掲載・放送後は必ず、掲載誌・同録DVDを本展実行委員会へ1部ご送付願います。

お問合せ先：大・タイガー立石展実行委員会 (青森県立美術館内) 〒038-0021 青森市安田字近野 185 TEL (017) 783-5240 FAX (017) 783-5244
 広報担当：唐牛雅範 栗嶋智美 学芸担当：工藤健志